

植物の中の5



◆西山 豊 (大阪)

この連載の依頼の手紙を編集部からもらったのは、ちょうど一年前である。いままですら単発の原稿は書いてきたが、一年間も記事を書き続けたことがなかった私は、何をテーマにしようかと悩んでいた。たまたま書店で見た雑誌の記事の1ページが、私の心をこれほど引きつけようとは思ってもよらなかった。それは、『趣味の園芸』(NHK出版、1996年11月号)という園芸の雑誌であった。

季節の花として、多彩な品種の登場でいっそう華やかな小ギク、夏の暑さや冬の寒さに強いビオラ、宿根性で毎年楽しめるサルビアなどが紹介されていた。きれいな花の写真集でも見るように雑誌をペラペラとめくっていた。すると、ユニークな形や可憐な花として多肉植物が載せてあった。

多肉植物、すなわちサボテンは、砂漠で育つ刺のある植物であるが、冬でも緑を楽しめることや美しい花を咲かせることから、園芸用に用いられている。シャコバサボテン(原種カニバサボテン群の一種)の赤色は鮮やかである。サボテンの花が咲くのは最近ではそう珍しくないが、私の小学生の頃(昭和30年代)は、サボテンは刺のある痛々しい植物であるというイメージしかなかった。それが、品種改良の成果か、簡単に花を咲かせることができるようになっている。

私は、フェルニア‘阿修羅’というサボテンの写真に目が止まった(図1)。美しい赤色で五角形の花を咲かせているのだ。その光景は、あの痛々しい刺のサボテンの上に赤色のヒトデが寝そべっているかのようであった。

変わった名前だ。フェルニアか。ヘルニアだったら脱腸だ。脱腸は苦しい病気だ。冗談を言っている場合ではない。

サボテンは五角形の花を咲かせるのだろうか。このことが気になった私は、他の写真を見してみる。フェルニア‘セブリーナ’やタキタス‘ペラ’というのも五角形の

花を咲かせている。キクのような多弁の花をつけているのもあった。それにしても、フェルニア‘阿修羅’というサボテンの花の形は、まるで分度器で角度を測ったかのように正確な正五角形を描いているのである。私はその晩、美しくて妖しいサボテンの夢を見ながらすやすやと眠った。

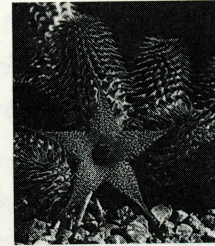


図1 フェルニア‘阿修羅’
『趣味の園芸』(NHK出版)より

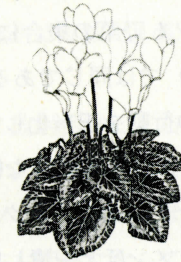


図2 シクラメンも5枚
『原色園芸植物大図鑑』(北隆館)より

何を研究のテーマとするか、それはかなりの下準備がいる。身の回りの不思議な現象をテーマにしている私は、過去に100個以上の疑問を解いてきたが、中にはつまらないテーマもあった。十分に下調べをすればするほどテーマに深みが出てくる。

私の頭の中には、昨日見た雑誌の写真、サボテンの花のことが焼きつけられていた。サボテンと正五角形、ヒトデと正五角形。後者は連載12回で一応の結論を得た。もし前者が証明できれば、動物界と植物界の中にひそむ「5」を証明できたことになる。これは大変なことである。もうこれは、ノーベル賞は間違いない。K.V.フリッシュはミツバチの8の字ダンスでノーベル生理学医学賞をもらっている(1973年)。ヒトデやサボテンでノーベル賞をもらっても悪くはない。はやる気持ちを押さえながら、私は下調べのために花屋さんへ急ぐ。

私の頭の中には、すでに「植物の中には5という数字がキーワードとして入っているに違いない」という刷り込みができあがっていた。

花屋さんに着いて、店頭並べてあった白色の花に目が止まる。名前を見るとシクラメンとあった(図2)。これがシクラメンなのか。恥ずかしい話だが、ごく最近までシクラメンの花を知らなかったのだ。これまでにシクラメンの花を見たことはあるが、その花がシクラメンに対応していること、つまり関連付けの

作業を怠ってきたのだ。

小学生の頃は田舎に育ったせいかわ、蝶やトンボを追いかけ回し、苔を集めたりした自然児そのものであった。結婚した当時は、女房にスキヤキの材料にハクサイを買ってきてと頼まれてキャベツを買ってきてしかられたことがある。ハクサイもキャベツも野菜の集合に属する、コーヒーカップもドーナツもトポロジー(位相幾何学)では同じである、などといって聞きかじりの現代数学を得意げに話して自分の行動を正当化していた。私は、都会の生活と数学の回りから外へ出ない、まるでカントのような観念の世界にどっぷりつかっていたのだ。

シクラメンといえば「シクラメンのかほり」という歌が思い出される。「真綿色したシクラメンほど〜清しいものはない〜出逢いの時の君のようです〜ためらいがちにかけた言葉に〜驚いたようにふりむく君に〜季節が頬をそめて過ぎてゆきました」

この歌は、小椋桂が作詞・作曲し、布施明が歌っていた。確か日本レコード大賞をとっている。私は歌が好きだ。この歌もよく聞く。でもシクラメンの花はどのような花であるのか実物を知らない。まさに言葉に酔っていただけなのだ。

シクラメンの鉢を手に取り、買うつもりもなくまじまじと見る。ほんとうに真綿色したように白い花がついている。シクラメンの花びらは何枚なのだろうか。ふと、このような疑問が頭の中をかすめた。植物の中にひそむ5が研究テーマになるかもしれないという思いがあったから、この疑問が自然と出てきた。

シクラメンの花びらの枚数は数えにくい。シクラメンの花を愛する人は多くても、私のように花びらの数を知るためにじろじろと見る人は少ない。花びらの重なりを計算に入れながら注意して数えてみる。なんと、シクラメンの花びらの数は5枚であった。たまたま5枚かもしれない。私は、花屋さんの店頭で展示してあるシクラメンの花鉢を片っ端から取り上げ、花びらの枚数を勘定した。そして、「真綿色」も「うす紅色」も「うす紫」もすべてのシクラメンの花びらが5枚であることを確認して、花鉢を買うともなく台の上に戻した。

ある確信を胸にして、つぎの花に興味が移っていく。小さな花、パンジー。この花は知っていた。ただし、サンシキスミレはパンジーの別名で同じ花であるこ

とまでは知らなかった。小学生の頃、花壇に植えてみんなで育てたことがある。でも、花びらの枚数にはそれほど興味はなかった。否、あったのかもしれない。でも、今ほど強烈に興味をもってはいなかった。

パンジーの花びらは、変形している。でも、これもシクラメンと同じく花びらの数は5枚だ。形は崩れているが、花びらの数は確かに5枚だ。変形は重力の影響だろうか。花の形は左右対称になっている。

ヒトデの研究の時に分かったことは、動物の形に放射相称と左右相称とがあることであった。原生動物に近いほど放射相称であり、高等動物になると左右相称になっていく。これは、運動に関係するらしい。ウニやヒトデはほとんど動かないから放射相称であり、魚やヒトは動き回るから左右相称になっている。植物の場合はもともと動かない。そこで重力の影響をあまりうけないと放射相称に、影響を受けると左右相称になるのだろうか。ランの花が左右相称である理由も関連づけられそうだ。このあたりの研究もかなり面白いものになるかもしれない。

シクラメンとパンジーの花を見てすっかり気を良くした私は、ルンルン気分自転車をこぎながら家に帰った。

家に帰って、シクラメンを植物図鑑で調べてみる。別名をカガリビバナ、ブタノマンジュウという。かがり火というのは美しい表現であるが、豚の饅頭はいけない。これでは「シクラメンのかほり」のイメージが壊れてしまう。それはともかく、シクラメンはシクラメン属、サクラソウ科に属するとある。何、サクラソウ? シクラメンはサクラソウと仲間なのか。外見は似ていないが、どこかでつながっているのか。そういえば、桜の花びらは5枚であった。シクラメンも桜も花びらが5枚で、何となく同じであるような気もする……

前回までは、ヒトデの足がなぜ5本かの問題に取り組み、一応の結論を得た。これからは花びらの数がなぜ5枚かの問題に取り組み、その結論を得ることを目標にしたい。この1年間の下調べで、だいたいのアウトラインを描くことができた。それを1年間に渡ってのりくらし説明していきたい。何、早く結論を言って欲しいだって。それは、駄目だ。私は1年間、この問題に悪戦苦闘したのだ。答えを知ることより解く過程の方が大事でかつ楽しいのだ。(大阪経済大学)